

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 18 日現在

機関番号：25502

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K13918

研究課題名(和文) 自閉症スペクトラム障害者におけるユーモア体験と状態像の関連

研究課題名(英文) the correlation of autism spectrum conditions and humor experiences

研究代表者

永瀬 開 (Nagase, Kai)

山口県立大学・社会福祉学部・講師

研究者番号：70784495

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：社会的コミュニケーションの障害と限局的・反復的行動パターンを特徴とする自閉症スペクトラム障害者において、ユーモア体験の特異性が多くの先行研究で示されてきた。しかしながら、これらの先行研究では自閉症スペクトラム障害が有するいずれの特徴がユーモア体験に影響を与えているのかという点について十分に検討することができていなかった。そこで本研究では、自閉症スペクトラム障害においてみられる様々な心理、行動上の特徴とユーモア体験との関連について検討した。その結果、社会的スキルが低いほどユーモア体験をすることに困難を抱えること、感覚刺激に対して過敏であるほどユーモア体験をしやすいことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義：ASDにおける心理学的原因論に関する新たな視点を提示することができた点である。これまでASDにおける心理学的原因論として、心の理論障害仮説や実行機能障害仮説など認知面に焦点を当てた仮説が多く行われてきた。本研究は、ユーモア体験という情動面に焦点を当て、ASDの心理・行動上の特徴との関連を検討するため、ASDの心理学的原因論に情動面から迫っていくことができた点と考えられる。

社会的意義：ASD者の対人関係に対する心理教育的支援への手がかりを示すことができた点である。本研究が示したASDにおけるユーモア体験の特徴を踏まえた心理教育的支援方法の開発に寄与すると考えられる。

研究成果の概要(英文)：Autism spectrum disorder (ASD) is a neurodevelopmental disorder characterized by deficits in social communication along with the presence of restricted and repetitive behavioral patterns. Some previous studies on the relationship between ASD traits and humor appreciation revealed that individuals with ASD had more difficulty in humor appreciation than did typically developing individuals. However, these previous studies could not examine which traits in autism spectrum disorders influence the humor experience. Therefore, the aim of this study was to reveal the relationships between humor appreciation and ASD traits. Results revealed that social skills and ease of excitation were unique predictors of humor appreciation. These findings suggest that poor social skills and ease of excitation influence the cognitive processes underlying humor appreciation. They contribute to our understanding of the relationship between sensory sensitivity and social communication in individuals with ASD.

研究分野：発達障害、情動、特別支援教育

キーワード：自閉症スペクトラム障害 ユーモア 社会的スキル 感覚刺激への過敏性

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

自閉症スペクトラム障害(以下、ASD)は、社会的コミュニケーションの障害と限局的反復的パターンを特徴とする広汎で連続した発達障害である(American Psychiatric Association, 2013)。そして近年、典型発達者の中にも連続的に ASD の特徴を有する者がいることがいるということも知られている(Baron-Cohen, Wheelwright, Skinner, Martin, & Clubley, 2001)。これまでいくつかの先行研究において、この ASD の特徴とユーモアとの関連性が指摘されている(Lyons & Fitzgerald, 2004; Samson, 2013)。ユーモアとは、特定の刺激を認知することによって喚起される一過性の愉悦の情動体験であると定義される(Nomura & Maruno, 2011)。ユーモアは他者と共有されることでコミュニケーションを促す機能を持つ情動であることから、ASD 者はユーモアを感じる際に、それを他者と共有することに困難さを感じるために他者とのコミュニケーションに困難さを抱えると考えられる。

このような背景のもと、筆者らは、ASD 者におけるユーモアについて、ユーモアを感じる際の認知処理過程に焦点を当て、典型発達(以下、TD)者との差異を検討してきた。その結果、

TD 者は刺激となる事象が深刻なものである場合ユーモア体験が低減されるが、ASD 者は刺激となる事象が深刻なものであってもユーモア体験が低減されない(永瀬・川住・田中, 2014)。

TD 者は言語的な理解が必要な刺激にユーモア体験をしやすいが、ASD 者は視覚的な理解が必要な刺激にユーモア体験をしやすい(永瀬・田中, 2015a)。ASD 者は刺激となる事象のその後の展開を想像し、ユーモア体験をする(永瀬・田中, 2015a)。TD 者は刺激となる事象の原因がわかりやすいほど強くユーモア体験する一方で、ASD 者は刺激となる事象に関連した事柄を連想するほど強くユーモア体験する(永瀬・田中, 2015b)という4つの差異を明らかにすることができた。

2. 研究の目的

これまで、筆者らは ASD の特徴とユーモアとの関連性について、ユーモアを感じる際の認知処理過程に焦点を当て、ASD 者と TD との差異を検討してきた。しかしながら、これまでの研究が ASD 者と TD 者の比較検討のみを行っている点は課題である。なぜなら、ASD 者が示す障害特性の重症度など状態像は ASD 者ごとに異なり、その状態像ごとに呈されるユーモア体験の特異性も異なったものになると考えられるためである。また、上述したように、TD 者の中にも連続的に ASD の特徴を有する者がいることをふまえると、TD 者も含めてより広く ASD 特徴とユーモア体験との関連を明らかにすることが必要である。

この点について Rawlings (2013) は、126 名の TD 者を対象にユーモア体験の喚起のされやすさと ASD の特徴の程度との間に相関関係があるかどうかについて検討した。その結果、自閉症スペクトラム指数(以下、AQ)における社会的スキルの下位尺度の得点と冗談文に対して感じるユーモアとの間に負の相関関係があることが示された。この結果は、社会的スキルの低さが感じるユーモアの低さに影響を与えていることを示唆している。加えて、Rawlings (2013) は、AQ における注意の切り替えとコミュニケーションの下位尺度の得点と冗談文に対する不快反応との間に正の相関関係があることも明らかにしている。これらの結果は、ASD 特徴の中の特定の特徴がユーモアと関連しているということを示した点で極めて意義深いものである。しかしながら、Rawlings (2013) において検討されたのは、ASD 特徴の中の一部に過ぎず、特に ASD 特徴の中でも大きな特徴として取り上げられる感覚の過敏性とユーモアの関連については十分に検討されていない。そこで本研究では、ASD 特徴とユーモアとの関連について、先行研究において十分に検討されていなかった ASD 特徴である感覚過敏も加えて検討する。本研究と先行研究との関係は Figure 1 のように示すことができる。

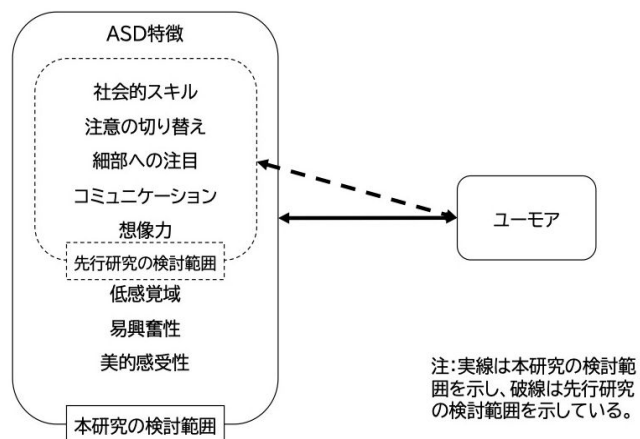


Figure 1 本研究と先行研究の関係性

3. 研究の方法

参加者: 102 名(男性 34 名、女性 68 名)の ASD の診断のない大学生が研究に参加した。参加者の平均年齢は 19.97 歳($SD = 1.16$; range 18–22 years)であった。また、全ての参加者は日本人であった。

ユーモア刺激: ユーモア刺激として本研究では冗談文刺激を用いた。冗談文刺激は参加者がどの程度のユーモアを感じるかを測定するために伊藤(2010)が作成したものであり、青年向けのファッション誌における読者コラムの中から選択された 12 の日常生活上のエピソードからなる。参加者には 12 の冗談文刺激それぞれに対して、「このエピソードを面白いと思った。」「このエ

ピソードに笑いそうになった。」という2つの質問が提示され、共に7件法(7:非常に当てはまる-1:まったく当てはまらない)で回答した。

質問紙:質問紙はAQ-JとHSPS-J19の2つから構成された。AQ-J(Wakabayashi et al., 2004): AQ-JはBaron-Cohen et al. (2001)が作成した自閉症スペクトラム傾向を測定する尺度の日本語版である。5つの下位因子(「社会的スキル」、「注意の切り替え」、「細部への注意」、「コミュニケーション」、「想像力」)から構成されており、参加者は50の項目数において4段階で評定を行った。HSPS-J19(Takahashi, 2016): HSPS-J19はAron & Aron(1997)が作成した感覚への過敏性を測定する尺度の日本語版である。3つの下位因子(「低感覚閾」、「易興奮性」、「美的感受性」)から構成されており、対象者は19の項目数において7件法で聴取した。HSPS-J19の原版であるHSPSはAQとも高い相関が先行研究において確かめられており(Liss, Mailloux, & Erchull, 2008)、ASD特徴における感覚の過敏性をとらえる上で妥当な尺度である。
分析手続き:まず、ASD特徴と感ずるユーモアの程度との関連を明らかにするために、AQ-Jの5つの下位尺度得点とHSPS-J19の3つの下位尺度得点、12の冗談文刺激に感じたユーモアの程度合計得点の間のピアソンの積率相関係数を算出した。次に、どのASD特徴が感ずるユーモアの程度に影響を与えているのかを明らかにするために、12の冗談文刺激に感じたユーモアの程度合計得点と有意な相関を示したAQ-JとHSPS-J19の下位尺度得点を説明変数、12の冗談文刺激に感じたユーモアの程度合計得点を目的変数としたステップワイズ法による重回帰分析を実施した。全ての統計的分析にはSPSS Statistics 23.0(IBM Corp., Armonk, NY)が用いられた。

4. 研究成果

まず、AQ-Jの下位尺度得点、HSPS-J19下位尺度得点との間のピアソンの積率相関係数を算出したところ、HSPS-J19の下位尺度である易興奮性とAQ-Jの下位尺度である社会的スキル($r = .17, p < .05$)、注意の切り替え($r = .51, p < .01$)、コミュニケーション($r = .34, p < .01$)、想像力($r = .19, p < .05$)の間に有意な相関関係がみとめられた。同様に、HSPS-J19の下位尺度である低感覚域と社会的スキル($r = .29, p < .01$)、注意の切り替え($r = .54, p < .01$)、コミュニケーション($r = .38, p < .01$)、想像力($r = .32, p < .01$)の間に有意な相関関係がみとめられた。その一方で、HSPS-J19の下位尺度である美的感受性はAQ-Jの下位尺度である細部への注目のみと有意な相関関係がみとめられた($r = .26, p < .01$)。

次に冗談文刺激に感じたユーモアの程度とAQ-Jの下位尺度得点、HSPS-J19下位尺度得点との間のピアソンの積率相関係数を算出したところ、感じたユーモアの程度とAQ-Jの下位尺度である社会的スキル($r = -.19, p < .05$)、HSPS-J19の下位尺度である易興奮性($r = .21, p < .05$)、低感覚域($r = .15, p < .05$)、美的感受性($r = .20, p < .05$)有意な相関関係がみとめられた。これらの結果をまとめたものをTable 1(Nagase, 2019)に示す。

Table 1.
Correlations between the Score of Humor Appreciation, the Five Sub-Scale Scores of AQ-J, and Three Sub-Scale Scores of HSPS-J19

Scale	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1. Humor Appreciation	-	-.19*	.13	.00	.05	.02	.21*	.15*	.20*
2. social skills		-	-.17*	.50**	.54**	.46**	.17*	.29**	-.15
3. local details			-	-.13	.01	-.06	.07	.02	.26**
4. attention swiching				-	.50**	.37**	.51**	.54**	.04
5. communication					-	.48**	.34**	.38**	.01
6. imagination						-	.19*	.32**	.04
7. EOE							-	.62**	.31**
8. LST								-	.05
9. AES									-

Note: AQ-J = Japanese version of the Autism-Spectrum Quotient; HSPS-J19 = Japanese version of the 19-items Highly Sensitive Person Scale, EOE = ease of excitation, LST = low sensory threshold, AES = aesthetic sensitivity

$n = 102$

*: $p < .05$

** : $p < .01$

上述したピアソンの積率相関係数の結果を踏まえた上で、AQ-Jの下位尺度である社会的スキルの得点とHSPS-J19の下位尺度である易興奮性、低感覚域、美的感受性の得点を説明変数、冗談文刺激に感じたユーモアの程度を目的変数とした、ステップワイズ法による重回帰分析を実施した。その結果、社会的スキルと易興奮性が感じたユーモアの程度に影響を与えるモデルが

示された ($F(2, 99) = 5.39, p < .01$)。このモデルにおける重決定係数 R^2 は.10であった。このモデルにおける回帰係数は社会的スキルが-.24、易興奮性が.25であった。加えて、社会的スキルと易興奮性における分散拡大係数 (Variance Inflation Factor; VIF) はともに 1.03であり、多重共線性に問題は見られなかった。これらの結果をまとめたものを Table 2 (Nagase, 2019) に示す。

Table 2.

Stepwise Multiple Regression Analysis: the Five Sub-Scale Scores of AQ-J, and Three Sub-Scale Scores of HSPS-J19 as Predictors of Humor Appreciation

	Humor Appreciation			
	β	t	p	VIF
social skills	-.24	-2.35	.02*	1.03
EOE	.25	2.50	.01*	1.03
LST	.11	0.90	.37	1.72
AES	.11	1.03	.31	1.16

Note. Humor Appreciation: $R^2 = .10, F(2, 99) = 5.39, p < .01$; β = standadized beta coefficients; VIF = variance inflation factor. *: $p < .05$

本研究で得られたデータを分析した結果、感じられるユーモアの程度に影響を与える ASD 特徴として社会的スキルと感覚刺激に対する興奮のしやすさが見いだされた。具体的には、社会的スキルを用いることに困難さを抱えるほど感じられるユーモアが弱くなり、感覚刺激に対して興奮しやすいほど感じられるユーモアが強くなるということである。本研究で明らかになった知見は ASD 者におけるユーモアの特徴を説明する際に有益である。これまで ASD 者におけるユーモアを扱った先行研究は、ASD 者はユーモアを感じることに困難さを抱えとするもの (Samson et al., 2013) と、ASD 者はユーモアを感じることに困難さを抱えないとするもの (Weiss et al., 2013; Silva et al., 2017) の 2 つに分かれていた。本研究の知見を踏まえれば、これらの先行研究間に見られる差異は、対象とした ASD 者における状態像の違いによるものと説明できる。つまり、これらの先行研究で対象とされた ASD 者の中には、社会的スキルはある程度のもを有しているが、感覚刺激に対する過敏性が高い者もいれば、社会的スキルに困難さがあり、感覚刺激にも過敏である者もいたというように、対象とした ASD 者の状態像が幅広い者であった可能性が考えられる。そのため、今後 ASD 者におけるユーモアを検討する際には、ASD 者がどのような状態像を有しているのかという点を踏まえた上で行われる必要があるだろう。また、近年は ASD 者がユーモアを感じることをできるように支援する試みも行われているが (Wu et al., 2016) その際にも ASD 者の状態像の違いを踏まえた上で支援をする必要があるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 永瀬 開	4. 巻 26
2. 論文標題 ユーモアを用いた情動調整プロセスに関する研究動向 - ユーモア産出過程とユーモア共有過程に焦点を当てて -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 山口県立大学社会福祉学部紀要	6. 最初と最後の頁 13-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Nagase, K.	4. 巻 6
2. 論文標題 The traits of autism spectrum disorder in the general population influence humor appreciation: Using the Autism-spectrum Quotient and HSPS-J19.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Cogent Psychology	6. 最初と最後の頁 1696000
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/23311908.2019.1696000	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Nagase, K.	4. 巻 122
2. 論文標題 Relationship between autism spectrum disorder characteristics and humor appreciation in typically developing individuals.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Psychological Reports	6. 最初と最後の頁 2282-2297
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/0033294118804999	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 永瀬 開	4. 巻 16
2. 論文標題 自閉症スペクトラム障害傾向が笑いに対する積極性に与える影響 - 自閉症スペクトラム指数を用いた検討 -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 人間環境学研究	6. 最初と最後の頁 35-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） doi.org/10.4189/shes.16.35	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 永瀬 開	4. 巻 15
2. 論文標題 自閉症スペクトラム障害者における情動調整に関する研究動向：使用する情動調整の方略と介入方法に注目して	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 人間環境学研究	6. 最初と最後の頁 35-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.4189/shes.15.35	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Nagase, K	4. 巻 3
2. 論文標題 Peer Support of Students with Autism Spectrum Disorders in Higher Education Institutions by Typical Students	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 IAFOR Journal of Psychology & the Behavioral Sciences	6. 最初と最後の頁 77-87
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.22492/ijpbs.3.2.06	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 永瀬 開	4. 巻 18
2. 論文標題 高等教育機関における発達障害学生へのピアサポートに対する学生の意識：発達障害学生が抱える困難さの種類に焦点を当てて	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 障害理解研究	6. 最初と最後の頁 11-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件(うち招待講演 0件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 Nagase, K.
2. 発表標題 Relationships between humor appreciation and sensory responsibility and deficits in social skill as the traits of autism spectrum disorder in typically developing individuals.
3. 学会等名 Asia Pacific Autism Conference 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 永瀬 開
2. 発表標題 自閉スペクトラム症傾向と日常生活におけるユーモアとの関連
3. 学会等名 日本発達心理学会第29回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 永瀬 開・藤田久美
2. 発表標題 小学校におけるインクルーシブ教育の実施に関する研究(1) - 担任教員の有するインクルーシブ教育に関する教師効力感に注目して -
3. 学会等名 日本特殊教育学会第57回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 永瀬 開
2. 発表標題 高等学校における特別支援教育に関する実態調査(1) - 高等学校が実施する支援内容に焦点を当てて -
3. 学会等名 日本特殊教育学会第56回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 永瀬 開
2. 発表標題 高等教育機関における発達障害学生に対するピアサポート(2) - 注意欠如多動性障害学生が抱える支援ニーズに焦点を当てて -
3. 学会等名 第81回日本心理学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 永瀬 開
2. 発表標題 高等教育機関における発達障害学生に対するピアサポート(1) - 自閉症スペクトラム障害学生が抱える支援ニーズに焦点を当てて -
3. 学会等名 日本特殊教育学会第55回大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考